主題

1. 執着する／魅了されるということ

何かに執着するということは、同時に魅了されていることであり、両者は同一のことである。執着する主体であったはずの自分が、実は客体として魅了される側であったと気付くとき、逃れられないという恐怖が生まれる。何かに執着し、没頭し続けるということで、他のあらゆる物事をなげうって他者や社会とのつながりを断ち、自分の人間らしさをも喪失することになる。

2. 執着を他者と共有するということ

執着を共有する相手とは、親しさや信頼関係と同時に一定の距離感がある。執着する物事の存在を共有することで、かえって独占欲が強まる一方で、独占状態から解放され、執着対象を冷静に見ることができるようにもなる。

構成

本文は一行空きで九段落に分かれているが、内容や場面のまとまりから六段落に分けた。第三段落の後半から「わたし」と人魚との関わりが描かれているとするのも可。

段落	ページ・行	段意
第一段	エノモトさんからの相談 初め～ P二四四・上16〈ベルを押した。〉	わたしの部屋の真上に住む画家兼高校教師のエノモトさんとは、ときどきコーヒーいれてもらいごちそうになるくらいの間柄である。ある日エノモトさんから相談に乗ってほしいと言われた。わたしとエノモトさんの部屋の前には桜の木があり、まだ咲き満ちる前ではあるが、風が吹けば花びらを散らせていた。
第二段	人魚を手に入れたいきさつ P二四四・上18〈扉を開けたとたんに〉～ P二四五・下3〈人魚なのだった。〉	エノモトさんの部屋の扉を開けたとたん、何かの匂いがしたが、しばらくすると部屋に慣れて気にならなくなった。エノモトさんは少し痩せたようだった。エノモトさんはコーヒーを飲むと、二か月前の話しを始めた。南方の海沿いを旅したエノモトさんは、漁村の小さな民宿に泊まった日の真夜中に、人間の大人の三分の一ほどの大きさの人魚を手に入れたのだった。
第三段	エノモトさんと人魚 P二四五・下5〈手に入れたものって〉～ P二四九・上14〈眠っていた。〉	浴槽には人魚がおり、その様子を見るうちにわたしは人魚のそばを離れたくなくなっていた。エノモトさんは人魚が気になって日常生活にも支障が出始め、仕事を欠勤するほどであった。このままではだめになってしまうと思い、わたしに預かってほしいと願い出る。人魚をわたしの部屋の浴槽に運ぶが、エノモトさんはしばらく人魚から離れようとしない。真夜中、突然エノモトさんは声をあげながら人魚を残して部屋を走り出た。
第四段	「わたし」と人魚 P二四九・上16〈たしかに人魚から〉～ P二五一・上12〈海まで走った。〉	人魚を預かって数日が過ぎ、いつのまにかわたしも人魚から離れられなくなっていた。浴室の中で生活するようになり、社会生活に対する関心が薄くなっていた。一週間後、これではいけないとも思わなくなったころにエノモトさんが訪ねてきた。人魚を海に帰すと言って黒いビニール袋に人魚を入れ、嫌がるわたしを強引に連れだし、海まで車で走った。
第五段	執着と魅了の恐怖 P二五一・上14〈どこの海岸なのか〉～ P二五三・下15〈眺めていた。〉	海沿いの土手は桜並木で、花びらが舞っていた。わたしとエノモトさんの声は次第に弱々しく、ぼんやりとした口調になる。少し笑うエノモトさんを見ると、人魚を海に投げることができた。人魚はわたしだけを見ており、わたしが離れられないと言おうとした瞬間、人魚が「離さない。」と言った。わたしはうわあと声をあげ、浜に向かって走り、耳をふさぎ砂に顔をうずめていると、人魚はいつの間にか去っていた。桜の花びらが散ってきた。
第六段	執着するための強さ P二五四・上1〈翌朝から〉～ 終わり	翌日からわたしは高熱を出し、体調が戻ったころには桜はすっかり散っていた。人魚のすがたかたちも、離れたくない気持ちもはっきりとは思い出せなくなっていたが、桜の散る様子を克明に覚えていた。人魚をずっと離さないでいるだけの強さがなかったのだと二人は思った。風に揺れる桜の新緑の若葉をそれぞれ眺めていた。